

た引用文と同じ文はほとんどなく御遺文では広汎して引用されていて、ほとんど日蓮聖人『注法華經』の注記とは違う。したがって日蓮聖人が、前述したような日蓮聖人『注法華經』の注記を御遺文にそのまま引用された事実と、この阿闍世王の引用に見えるごとく日蓮聖人『注法華經』に注記したのみで御遺文には同様に引用されない場合もあることが、この阿闍世王の一例ではあるが伺うことができた。

今回は、日蓮聖人『注法華經』に見られる歴大な注記の中から、法華經序品という極めて限られた部分の検討を行なったのみであるが、これからさらに方便品以下の注記について検討を進めていきたい。

日蓮聖人における一闡提成仏と 仏性について

立正大大学院 関 戸 堯 海

『開目抄』（定五五六頁）、『妙心尼御前御返事』（定

一一〇三頁）を拝見すると、日蓮聖人は自分自身をも含めた日本国中の人々すべてが謗法の罪を犯しているのだという認識があることがうかがい知れる。このため謗法の克服は末法の凡夫の成仏を考えるにあたって重要な問題となってくる。

謗法の克服について検討するにあたって、謗法に準ずる罪ともいえる五逆の成仏も重要となってくる。そのため日蓮聖人も阿闍世王・提婆達多をしばしばとりあげて、「五逆・謗法」というように、とりまとめて成仏の検討をしている。

また信不具足とも訳される一闡提成仏について、涅槃經では詳細な検討がなされているが、日蓮聖人は涅槃經の検討を下敷きとした上で、一闡提成仏の可否は信不信のありようによると捉えていた面がみられる。そして、しばしば五逆・謗法と一闡提とを結びつけて「五逆・誹謗闡提」などという表現を用いて、最も救われがたい者の成仏についての検討を行っている。

そこで、今回は日蓮聖人遺文の中で五逆・謗法・一闡提成仏について言及されている部分をとりあげ、信不信のありようと末代凡夫の成仏についてどのような検討がなされているかを考えていきたい。

『顯謗法鈔』(定二七二—三頁)、『法華題目鈔』(定三九二頁)、『四信五品鈔』(定二一九六頁)、『日女御前御返事』(定一三七六頁)などにおいて、五逆・謗法・一闍提と関連づけられた、信不信のありようと末法の凡夫の成仏についての検討がみられるが、その構図が端的に示されているのが『波木井三郎殿御返事』にみられる。

阿闍世王殺^レ書父^ニ禁^セ固^シ惡人^也。雖^レ然^ト來^ニ涅槃經^ニ座^ニ聽^ク聞^ク法華經^ニ非^レ治^シ現世惡瘡^ニ延^レ引^ク四十年壽命^ニ結^レ得^ク無^レ根^初住佛記^一。提婆達多闍浮第一^一一闍提人捨^ニ置^ク。一代聖教^ニ奉^レ值^シ此經^ニ授^ク與^ク天王如來^記前^一。以^レ彼推^レ之^ニ末代惡人等^成佛不成佛罪^不依^ニ輕重^一。但此經可^レ任^シ信不信^一。(定七四九頁)

という一節であると思われる。ここで阿闍世王・提婆達多^の事例をもとに、末代の悪人の成仏は信不信のありようによるという結論が導き出されるが、その背景となっているのが「五逆・謗法・一闍提」の成仏についての検討であると考えられる。そして「末代の悪人」とは、とりもなおさず末法の凡夫であるといえるであろう。

以上のような点から、日蓮聖人は一闍提成仏や阿闍世王・提婆達多などの最も救われたい者を中心として仏

性の検討をおこなっているといえるだろう。そして、その仏性についての検討は、理論として標榜された一切衆生悉有仏性をいかに具現化し、末法の衆生の成仏に結びつけるかという、より現実的なものであったといえるのではなからうか。

八品の世界

芹 澤 寛 哉

一、

八品の世界は観心本尊抄において詮顯された本尊の世界であって、一切の存在や理法の帰趨であると同時に根源たる超越の世界である。本尊抄第二十番問答において明示されているこの世界は

- 1、時間的には無限永遠で常住
- 2、空間的には無辺、三千の依報正報の一切を具足する。
- 3、不生不滅の永遠と変化の瞬間、一切の全と所化の